

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成 29 年 4 月 24 日（第 28 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「差別」とは、何なのでしょう。そのことを考えさせられた出来事をご紹介します。「差別」をなくし、温かい世の中になってほしいなという願いを込めて。

所長 小沢 浩

### ～差別～

インタビューや感想文を読んでいると、「いのちの授業」を受けた子どもたちの心の変化が読み取れる。

家族へインタビューしたことにより、自分がこの世に「生」を受けるためにどれだけ心配をかけていたか、どれだけ大切にされていたか、どれだけ喜んでくれたかがわかり、皆が「ありがとう」という感謝の言葉を添えていた。そして、五体満足で、健康で。と思っていた。

次に「障害」の子のビデオで笑顔に触れ、いくつもの「障害」という個性に触れ、「障害」を体験し、「かわいそう」「こわい」と思っていたイメージが、みんな同じ人であり、「障害」を持ちながら明るく生きていることを学び、その強さを知り、「すごい」に変わっていった。

障害児者は、見た目や動きが違う。でもそれがどうだというのだろう。それこそ「個性」である。



ある日、外来に私が診ている高校生の脳性まひの子が突然やってきた。お母さんが「自分で言いな」と声をかけた後、E君はうつむきながらゆっくり話し始めた。「首が動いてしまうんです。治してください。」と。みると首が左右に細かく動いている。振戦である。私は脳波を数日後にオーダーし、「大丈夫だからね。」と言って外来を終えようとした。そのとき、お母さんが「ちょっと」というので、E君を外に出しお母さんだけにした。お母さんは、

「緊張すると首が揺れてしまうんです。今まで、通学のときに小学生に会うと、毎日『うぜえー！』『死んじまえ！』と言われ続け、それでもがんばって学校に行っていました。心ない大人が車を止めて、『死んでしまえ』と叫んで去っていったこともあります。



後ろをつけていったこともあります。が、そのときにEは小学生を見ると走って逃げていくんです。学校に申し入れても、『学校が今荒れているから』と言って改善のきざしも見えません。心が折れてしまったんです。家で本当に荒れていて、私はどうしたらいいのかわからなくなって……。カウンセラーの先生が、『心を診てくれる先生のところに行って薬をもらってきたほうがいい。』と言っているんです。」とふだんは明るいお母さんが目に涙をためていた。

講演会などで障害という個性をもった子どもたちの素晴らしさを伝える機会をいただき、想いを語っている。でも、講演会に来てくれる人には実は伝えなくていいのかもしれない。来てくれるだけでわかっているから。本当に伝えなければいけないのは、「うぜえ！」「死んじゃえ！」と言っている人たちであろう。

「差別」という言葉は、「差があって別れる」ともとれる。「差」って何だろうか。相手に何かをするとき、自分が相手の立場に立ってやられていやだということをやっている。それは「差別」なんだと思う。自分がやってもらってうれしいことを相手にする。それを広げていく。そのことが大切なのだと思う。「うぜえー！」



「死んでしまえ」という心ない言葉かけた子どもも、障害という個性を持って生きている子どもたちの素晴らしさを知っていれば、「おはよう」と当たり前のようにあいさつを交わす仲間になれるのではないか。だからこそ、子ども達の素晴らしさを伝えること、「いのちの授業」が大切なのだと思う。

これは大人も同じこと。言葉に出さないだけで、「差別」をしている大人はいっぱいいる。

そして、我々は知らないうちに人を傷つけていることがある。人を傷つけてしまった時、そのときはどうかまわりで気づいた人がそのことを教えてあげてほしい。そして、気づいたらあやまればいい。「ごめんなさい」と。

木をはなれ 人にふまれて  
生きるのは、赤い手をした  
もみじなりけり

(奇跡がくれた宝物 小沢浩 著  
クリエイツかもがわ より)

